

南大阪地域の活性化に向けて

河内長野市の名産品「つまようじ」を用いた観光の提案

阪南大学 国際観光学部 3回生 清水ゼミ

西澤 明広

清水 敦弘

高橋 香菜子

藤原 醇

新城 朱里

目次

第一章 はじめに

1-1. 研究背景

1-2. 研究目的

1-3. 研究方法

第二章 事前調査

2-1. 河内長野市の奥河内事業

2-2. 河内長野市の観光資源調査

第三章 フィールド調査とヒアリング調査

3-1. フィールド調査内容

3-2. ヒアリング調査内容

3-3. 「つまようじ」を活用した観光促進の企画・提案

第四章 まとめ

第一章 はじめに

1-1. 研究背景

河内長野市は、大阪府南河内地域に位置する市である。南部の山麓地域では滝畑四十八滝や岩湧山などの大自然、観心寺や金剛寺、高野街道などの歴史的価値のある史跡や建造物が残る。楠木正成氏ゆかりの地としても知られており、国宝・重要文化財数に関しては全国の市町村のうち日光市に次ぐ 12 位であることから「文化財のまち 河内長野」と称される。河内長野市はこの数多くある文化財や近年オープンした地産地消を目的とした道の駅などを活用し、観光用ウォーキングマップを作成するなど観光の視点から地域の魅力アップに努めている。他にも市は行政からの魅力発信だけでなく、地域住民ならびに府内学生ボランティアを募集し「都市ブランド検討会議」を開催することで河内長野市独自の都市ブランドの構築を最終目標にし、市民がまちへの愛着や誇りをより深く持てるよう活動を行っている。このことから河内長野市はまだ潜在的活性化の可能性があると考え、今回の研究地を河内長野市に決定した。

1-2. 研究目的

前項から河内長野市は豊かな自然や歴史的・文化的資源をはじめ、大都市や関西国際空港にも近いといった地理的資源を持っていることが分かった。人や情報、技術などが交流することにより、時代の流れに柔軟に対応できる新しい産業が育つ、活力あるまちづくりを進めていこうとしていることが分かる。学生視点ではあるが、河内長野市が掲げる将来都市像である「人・自然・歴史・文化輝く ふれあいと創造のまち 河内長野」の実現に向けて、新たな観光用ウォーキングマップの作成、提案をすることで河内長野市のさらなる活性化につなげることを目的とする。



写真—1 河内長野市の観光パンフレット

1-3. 研究方法

・ウェブ調査、パンフレット調査、現地調査、ヒアリング調査

第二章 事前調査

2-1. 河内長野市の奥河内事業

奥河内とは河内長野市を中心とする大阪南東部の緑豊かな山麓エリアのことをいう。そ

の玄関口、河内長野駅は大阪市内から電車に乗って約 30 分であり、関西国際空港へは約 1 時間の交通至便の地にある。奥河内事業の一環として設立された奥河内くろまろの郷は、河内長野市の目標である地産地消の推進、交流人口の増加促進、観光と産業の情報発信、防災・協働・学習・環境政策の新たな拠点として、河内長野の街の魅力を高める要素を持っている。奥河内くろまろの郷は、奥河内ビジターセンターや地産地消レストランなどを始め、JA 大阪南農産物直売所「あすかてくるで河内長野店」と、大阪府立花の文化園、林業総合センター「木根館」、くろまろ館「ふるさと歴史学習館」の施設が一緒になった、食べて・遊んで・体験できる、家族みんなの笑顔があふれるエリアとなっている。このくろまろの郷は、河内長野市が観光政策で行っているウォーキングマップのゴール地点としてもよく利用されている。

また、河内長野市は、爪楊枝（つまようじ）の産地としても知られており、全国の爪楊枝の生産の大半がここ河内長野で行われている。

2-2. 河内長野市の観光資源調査

河内長野市の主要な施設は、河内長野駅周辺、河内長野市役所、花の文化園、奥河内くろまろの郷、つまようじ資料館だ。それぞれの場所の位置関係は（図-1）の通りである。上記の地は徒歩でも廻ることができ、河内長野駅 - くろまろの郷間を結ぶコースは河内長野市が紹介する観光用ウォーキングマップの最長コースとして紹介されている。

次に、それぞれの場所の現状をまとめていく。

図-1 河内長野市内の位置関係

写真-2 河内長野市役所内展示スペース



・河内長野駅周辺の観光資源

河内長野駅前には、市民から「ラブリーホール」という愛称で親しまれている河内長野市立文化会館がある。このホールは市民への一般貸出の他にもアーティストを招くなどして市内のみならず、市外からの来訪促進活動にも活発に利用されている。

また駅前には昔からの商店街がある。近年の従来型商店街の衰退の流れに逆らえず、一部シャッターが閉まったままの店舗もあるが、まだ比較的人通りは多いと思われる。

・河内長野市役所の中の展示

市街地の玄関口と言える場所に建てられており、全フロア 8 階建のかなり大きな建物である。市役所内部は 1 階から 8 階まで多くの部署にわかれており、1 階エントランスは大きな展示スペースとなっている。展示スペースは申請が通れば誰でも使用することができ、

(写真-2) のように地元学生が河内長野市の魅力発見をおこなった結果報告を張り出すなど、市民や学生の活躍を展示する広報の場となっている。展示スペースは最長 2 週間貸切ることができ、調査のために訪問するたびに違う団体が様々なものを展示しており賑わっていた。さらに河内長野市には、爪楊枝やすだれ、釘や鋷などの特産品があり、これらはエントランスに常設展示されている。(写真-3)

写真-3 河内長野市名産品



・花の文化園

この施設は名前の通り四季を通して様々な植物を展示している施設で、10 ヘクタールもの広大な土地のいたるところに綺麗な花々が咲き誇っている。特徴的な三角形のピラミッド型温室には、洋ランやサボテンといった普段の生活では目にすることがない植物も多数植えられている。さらにこの施設は植物を見て回るだけでなく、大道芸やフリーマーケットなどのイベントを定期開催しており、レストランやカフェ(現在休業中)、工房で様々な体験まで出来るようになっている。そして最近さらに注目を集めているのは、去年から開始された ILLUMINAGE イベントである。実際に参加したが、日中の花々を眺める落ち着いた雰囲気とは違い、花々と電球という幻想的な雰囲気を漂わせていた。イベント期間中は通常営業時よりもはるかに大勢の来訪者がカメラを持ち来園している。このように、こちらの施設は全盛期に比べると来場者は減ってきているが、それに歯止めをかけるべく様々な施策を打ち出し来場者を確保しようとしている。

・奥河内くろまろの郷

この施設は前項でも述べたように、2014年11月29日に河内長野市の地産地消の推進と、周辺にある花の文化園や河内長野市立ふるさと歴史学習館(くろまろ館)を含めた、観光と産業の活性化を目的として造られた道の駅である。施設内にはビジターセンターや地産地消レストラン「TERRA」、JA 大阪南農産物直売所「あすかてくるで河内長野」などがある。ほかにもバザール広場や交流農園があり、食べて・遊んで・体験できる、家族みんなの笑顔があふれるエリアとなっている。

第三章 フィールド調査とヒアリング調査

3-1. フィールド調査内容

私たちは実際に2-2に挙げたすべての施設でフィールド調査を行った。その結果、河内長野市には多数の観光可能施設があり、政策や戦略次第で今以上の観光都市となる潜在的可能性を秘めているのではという印象を持った。事実、ヒアリング調査(詳細は後述にて)からも奥河内政策などで市内の人の動き、外部からの人の流動も少しずつではあるが増えていることがわかる。

3-2. ヒアリング調査

2015年12月8日(火)、河内長野市で取り組んでいる観光政策の現状や課題を知ることが目的に、河内長野市役所観光政策課にヒアリング調査を行った。ヒアリング調査で分かった事は以下の通りである。

河内長野市 観光政策の現状と課題

河内長野市は民間主体の観光施設が乏しいため、観光というキーワードでの集客は容易ではなく、まずは行政主体で動かざるを得ないということが分かった。さらに、河内長野市自体が広大で、どの場所のどういったものを、どのようにアピールすれば良いかの選択が難しく、これといった特産品やお土産が無いということも問題視していることが分かった。観光政策課の担当者は、行政主体ではなく、地域住民からも河内長野市を活気づけていこうという気持ちを持ってほしいと考え、最終的には観光が活性化することにより、河内長野市の良いPRができ、それが人口増加に繋がればと考えている。また、店舗などの商業施設のさらなる活性化、市内産業の活性化を目標としていることが分かった。

ヒアリング調査より、河内長野市の特産品を新たな観光資源とし、それを活用した観光促進の提案が可能ではないかと考え、「つまようじ」を用いた学生目線の観光促進を提案することを目的とした。

3-3. 「つまようじ」を活用した観光促進の企画・提案

観光商品を提案するため、河内長野市の特産品である「つまようじ」に着目した。河内長野市は25年程前まで「つまようじ」の日本国内の約96%を誇っていたが、中国の廉価な「つまようじ」に押され、生産が100分の1にまで激減し、中国への工場移転や廃業などによりつまようじ産業が衰退した。そこで、河内長野市の観光資源として新たに「つまようじ」を活用することで、河内長野市の特産品＝「つまようじ」というイメージ付けをすることができ、またお店のさらなる活性化、市内産業の活性化にも繋がるのではないかと考えた。この「つまようじ」を活用した観光促進の企画・提案は具体的に以下の2点である。

(1) 「つまようじアート」

「つまようじアート」とは、発泡スチロールに色の付いた「つまようじ」を刺していき、全て刺し終わると1つの大きなアートになるというものである。

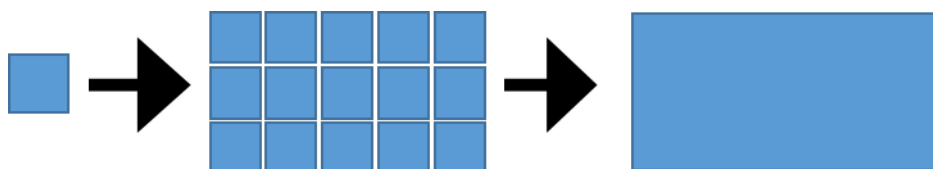


図-2 「つまようじアート」の例

爪楊枝アート 製作工程

左から 下絵 爪楊枝の着色 完成アート

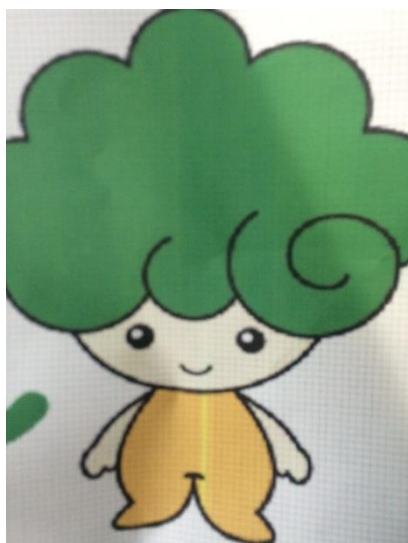


写真-4 下絵



写真-5 爪楊枝着色

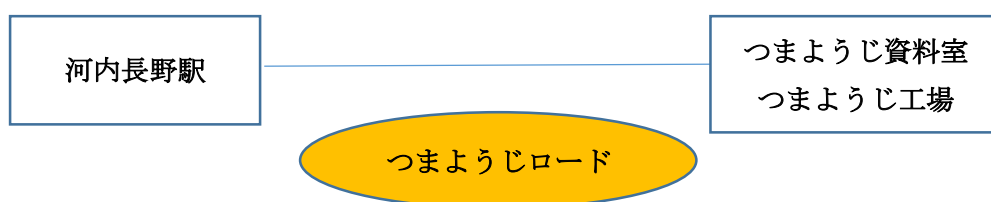


写真-6 完成アート

簡単にできるという利点を活かし、小・中学校の文化祭や高等学校の学園祭で毎年、「学生」が中心となり「つまようじアート」を作成する。そして、完成したつまようじアートは、河内長野駅や河内長野市役所などに展示する。

(2) 「つまようじロード」

「つまようじロード」とは、河内長野駅を出発点とし、最終到着点であるつまようじ工場とつまようじ資料室を結ぶ道筋のことである。



図—3 つまようじロードの説明

「つまようじロード」

河内長野駅から歩いてつまようじ工場と、その工場が経営するつまようじ資料室に至るまでの間には、飲食店をはじめとした様々な店舗が点在しており、これらの店舗へ私たちの企画を提案し、許可を得たお店にはつまようじを使って食べられる試食品、又は来訪者に既存のお土産を提供してもらおうと考えた。そして、店舗のロゴなど「つまようじアート」を活用したシンボルアートを作成してもらう。また訪れた人々が一緒に作成していく「つまようじアートスポット」を用意する。このように多くの人々が関わって1つのつまようじアートを作り、それを継続していくことで、つまようじアートというひとつの観光商品化が可能となると考えた。

このように河内長野市の現行の観光政策にひとつ地元産業を利用したアイデアを加えることで、河内長野市民には「つまようじ」への関心、誇りを持ってもらえるように、市外からの観光客には「つまようじロード」をきっかけとし、少しでも多様な河内長野市を知ってもらいきっかけとなればと考えた。また、行政主体の観光推進と並行して、地域の産業が協力することで、河内長野市の観光誘客を盛り上げていくことが可能ではないかと考えた。

以上の2つの具体案を2015年12月22日(火)に河内長野市観光政策課、西本氏、倉木氏に提案した。議論の結果、「つまようじ」を観光に結び付けることが難しいということや、「つまようじアート」「つまようじロード」の準備の面で、今年度実施することが厳しいなどの理由により、この企画は見送られることとなった。

第四章 まとめ

今回のヒアリング調査ならびにフィールド調査から、河内長野市は魅力的な観光資源が多く存在する観光都市として可能性を秘めた市であるということが分かった。

河内長野市が取り組む奥河内事業についても、本市の特徴である大自然を全面的に押し出し、ガーデニングや大自然を駆け巡るサイクリングなど、見るだけでなく体験という形で観光を推進していた。また、歴史的文化財もウォーキングコースという形でアピールしており、自然資源、歴史文化資源ともに、観光商品の現在の傾向である「見るだけでなく、体験観光」というポイントをとらえた観光推進を行っている。

しかしヒアリング調査でわかったように、多数ある観光資源から河内長野を代表する資源をひとつに絞ることができない、また市が自信を持って売り込むことができる特産品がないとの意見は事実のようだ。今後この課題を解決することで、河内長野市の観光がより魅力的で外部へ強くアピールできるものになる可能性があるとのことであった。今後また行政の方々とこのような活動ができる機会があれば、この課題解決に向けて共同研究したいと考える。